

次代へ伝える 平和への願い

広島に原爆が投下されてから、今年で63年。戦争の悲惨さ・平和の大切さを学び・考える活動が行われています。戦争・原爆の記憶を風化させず、二度とあの惨劇を繰り返さないためにも、平和や命の尊さを次代へ伝えていくことが必要です。

被爆アオギリの命名式と 平和学習発表会



命名「幸せの樹」
三和中の被爆アオギリ二世

「歴史と文学の館ふれあい平和サロン志麻利」（小島）を運営する志麻利友の会では8月6日、昨年植樹した被



平和学習の発表

爆アオギリに、三和中学校生徒が考えた名前の中から4点を選び、三和公民館前の二世と三世をそれぞれ「ピースくん」「ホープくん」、三和中学校の同アオギリを「幸せの樹」「希望の樹」と命名。事務局の横山寿徳さんは、「平和と希望の想いを込めた」と話した。その後、小島交流会館で三和中学校1年生7名が、総合学習で学んだ疎開児童の様子や小説「黒い雨」などの学習発表をした。

平和学習会で 紙芝居や被爆体験を聞く

町が主催する平和学習会が8月6日と7日の2日間、三和公民館と油木コミュニティセンターで開催され、訪れた人は平和についての想いを深めた。

6日の三和公民館での平和学習会では、絵本の読み聞かせの会のメンバー3名が「かわいそうなぞう」など戦争や原爆を題材にした紙芝居や絵本で平和の尊さを訴え、また、佐藤守さん（福永）が語る被爆当時の凄惨な状況にも30名余りの来場者は熱心に聞き入っていた。

翌日行われた油木コミュニティセンターでの平和学習会では、今川利春さん（小島）が被爆体験を話された。



絵本の読み聞かせ

被爆体験を語る佐藤守さん



今川 利春さん (小島・84歳)

なぜ、広島にいたか。それは戦争があったから、平和ではなかったからです。

昭和17年5月国民総動員令によ

り宇品へ。召集される時、死ぬとわかっていて戦地へ送った母の気持ち。あの時はわからなかったが切ない思いだったと思う。人間の愛情は今も昔も変わらない。母はここを出るときに背中を「元気でやれよ」と叩いてくれた。「悲しい」と言えない時代、その時はそれが精一杯の愛情の表現だったと思う。その後大阪、博多へ行き、昭和20年、21歳のとき最後の現役兵として広島に戻ってきた。

8月6日、原爆が落ちた。自分も後頭部と頭の横あたりにけがをして、出血が止まらなかった。上官やまわりの人に「出血が激しいから、手当を受けろ」と励まされ、臨時の陸軍病院が開設された戸坂小学校へ向かった。途中、倒れ、水をくれと叫ぶ人が大勢いたが、どうすることもできない。太田川には水を求めた人たちの死体が流れていた。大きな木が刺さったまま病院に向かう人。ガラスの破片が刺さり黒大豆をぶつけたように血が噴いている人。一番衝撃を受けたのは、避難途中に出産したのだろうか、へその緒がつながったままの血まみれの嬰兒を抱え歩く髪の長い女性。病院も、足の踏み

場がないほどの人だった。死んだ母親の胸にすがる幼子。死んだわが子を抱き続ける母親。壁にもたれて事切れる人。自分で行動できる人だけが治療を受けることができた。動けない人を治療しないのかという批判の出るような環境ではなかった、自分のことだけで精一杯。極限の状態、戦争の悲惨さだと思う。



佐藤 守さん (福永・78歳)

あの時、15歳で広島の師範学校に通っていた。8月6日は、朝から空襲警報があり、防空壕に避難。

警報が解除され、2階の部屋に戻るとすぐ、目の前がまっしろになるような光がきて、意識がすーっとなくなるのがわかった。気が付くと埃のなか、崩れた建物に埋まり動けなかった。「助けて」と声がかれるまで叫んだが誰もいない。また、気を失った。次に意識が戻ったとき、何とか抜け出すことができた。先生から「宇品へ逃げろ」と言われた。友達はひどいけがだった。顔は赤くはれ、片目はつぶれて、腹は裂け腸がでていた。友達の腸を腹に押し込め

て上と下の皮を手でつかんで肩を組んで宇品へ歩き始めた。自分自身も背中にえぐりとられたような大きな穴が開いていた。宇品へ向かう途中、道端で死んでいる人、犬や猫、空を飛んでいた鳥も死んでいた。無事な人はいない。川にも人が死んで流れていた。道に生えている生木も裂け、ごうごうと燃えていた…。病院は中に入れないほどの人。兵隊がけが人をトラックへのせて連れてきてはおろしていく。泡を吹いて倒れている人や、やけどで

皮がめくれている人。治療ができて状態ではなかった。その後、実家に帰り治療を受けた。広島から帰ってくる人が次々と亡くなる中、自分はいつまで生きられるのだろうかとひどく不安になり、精神的な痛みも大きかった。あの日、一瞬で何万もの人が亡くなった。あの残酷な情景を、忘れることはできない。